

言葉を通して生きる力を育む国語科の授業に関する総合的研究

- ◎石井 正己（東京学芸大学日本語・日本文学研究分野）
- 菅 俊輔（東京学芸大学附属小金井中学校国語科）
- 愛甲 修子（東京学芸大学附属小金井中学校国語科）
- 数井 千春（東京学芸大学附属小金井中学校国語科）
- 石井 健介（東京学芸大学附属小金井中学校国語科）
- 川嶋 正志（東京学芸大学附属竹早中学校国語科）
- 松原 洋子（帝京科学大学教育人間科学部）
- 田中 成行（岩手大学教育学部）

代表者連絡先：ishii@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】国語科教育、生きる力、病、戦、災い、宇治拾遺物語、万葉集、方丈記、教材開発

1 本プロジェクトの目的と内容

東日本大震災後の現代社会において、生と死をどう受け止めるかが緊急の課題になっている。教育の現場も、当然、そうした社会の動向と向き合わねばならない。なかでも、思春期を迎えた子供たちに対する取り組みは急務である。そうした状況を踏まえて、東京学芸大学附属小金井中学校の国語科では、平成 24 年度の公開授業研究会の実施以来、命を見つめて生きる力を育むための国語科の授業について議論を重ねてきた。そこで、平成 26 年度・平成 27 年度は、特別開発研究プロジェクトに申請し、その助成を受けて研究活動を行い、研究代表者石井正己『平成 26 年度特別開発研究プロジェクト報告書 命を見つめて生きる力を育む国語科の授業に関する総合的研究』（東京学芸大学、2015 年 3 月、76 頁）、研究代表者石井正己『平成 27 年度特別開発研究プロジェクト報告書 命を見つめて生きる力を育む国語科の授業に関する総合的研究』（東京学芸大学、2016 年 2 月、108 頁）の報告書をそれぞれ発行した。

それをさらに発展させたいと考え、平成 29 年度・平成 30 年度の 2 カ年度にわたって、「言葉を通して生きる力を育む国語科の授業に関する総合的研究」を申請し、その助成を受けて研究活動を進めた。昨年度にふいては、すでに、研究代表者石井正己『平成 29 年度特別開発研究プロジェクト報告書 言葉を通して生きる力を育む国語科の授業に関する総合的研究』（東京学芸大学、2018 年 2 月、105 頁）を発行・発送した。本年度は、古典（古文・漢文）の作品について事前の現地調査・資料収集を実施する予定であったが、予算配分からそれは不可能になったので、「病」「戦」「災い」をテーマとする授業を実践し、報告書の印刷・発行に当てることにした。授業について各先生が具体的な立案と検討を行った上で、11 月に東京学芸大学附属小金井中学校の第 30 回教育研究協議会を中心として研究授業を実施した。

また、研究協議会には、このプロジェクトに関わり、その後、帝京科学大学に転出した松原洋子、附属竹早中学校に移った川嶋正志の両先生もご参加くださった。岩手大学に転出された田中成行を含めた 3 先生が、大学と附属学校で国語科教育に関わっている立場から参画した。そうした点から言えば、こうして進めてきたプロジェクトは、大学教育や附属教育の国語科教育の中で大きな広がりを見せていると言えることができる。

また、石井正己はこのプロジェクトのテーマを意識しながら、大学の授業を行うとともに、各地で講演を行ってきた。ここには図書館等で行った講演から 3 点を選んで、プロジェクトにつなげることにした。どれもそれまで埋もれていた作文や記録・談話を教材として開発するための国語科の

基礎研究になるはずであり、それらの内容は中学校の国語科教育のみならず、小学校や高等学校の国語科教育においても有益であると考えている。なお、これらの研究成果は、大学においては全学の学生向けに開講されている授業科目である「国語科研究」、A類・B類の国語科教室の学生向けに開講されている授業科目である「国語科教材論」等の中で生かされている。

2 本プロジェクトの実施

まず、東京学芸大学附属小金井中学校の授業は、11月の平成30年度教育研究協議会の開催に合わせて実施することにした。国語科の本年度の研究主題は「「言葉の力」を実感し合う学習指導～「言葉の力」を「生きる力」に拡げる学び合い～（2年次）」であるので、本プロジェクトをこのテーマと連動させることを考えた。具体的には、数井千春が1年生、菅俊輔が3年生の授業をそれぞれ次のように実施した。

- 1年生 物語を語る「ことば」—単元「私たちが考える人間らしさ」の学習材— 数井千春
- 3年生 命を見つめ生きる力を育む災害伝承としての「言葉」
—『方丈記』と災害伝承の碑を中心に— 菅俊輔

なお、愛甲修子は2年生の担当であり、研究授業は行わなかったが、研究協議会で報告を行うことにした。研究授業実施後の研究協議会では、両教師が実施した研究授業について、その意図を説明し、質疑応答を行った。その際に松原洋子と石井正己が助言者になって、本プロジェクトとの関係を述べ、司会・進行は石井健介が務めた。

研究協議会終了後、報告書をどのようにまとめるかについて協議し、論文をまとめるにあたっては、単なる授業実践の報告にならないように、学術論文としてしっかり書くことを心懸けた。これまでの国語科教育の授業実践の報告を見ても、それぞれの教師が行った個別の実践事例が並ぶだけで、理論化がなされていない状況があるからである。特に今回は、テーマにした「言葉を通して」という「言葉」に対する自覚をどのように深めるかということ意識してまとめた。

次に、言葉を通して生きる力を育むための教材研究をさらに深めたいと考え、本プロジェクトのメンバーであり、岩手大学に転出した田中成行が「古典教材『方丈記』『枕草子』の小・中・高の内容決定のための課題—生と死、恋愛と結婚、新暦と旧暦—」、松原洋子が「枝幹二氏の遺書に関する新たな資料」、川嶋正志が「戦争と向き合う「ことば」—ヒロシマ・ナガサキから考える—」をまとめることにした。それぞれの研究は個別だが、「病」「戦」「災い」のテーマを展開するものであり、特に松原の研究はこれまでの研究に対する反響があったことをふまえている。従って、これらの研究は東京学芸大学と附属小金井中学校の間にとどまらず、附属や大学における国語科教育に広く関わることになっている。

そして、石井正己は「言葉を通して生きる力を育む」ということを意識しつつ、各地で講演を行うことを考えた。文京区立本郷図書館では「小学一年生が書いた関東大震災」、岩手県の釜石市立図書館では「釜石小学校の残した遺産を伝えたい」は、兵庫県神崎郡福崎町で開催された山桃忌では「少年の体験と学問の形成—『故郷七十年』と『遠野物語』—」の講演を行った。それぞれ、「復興」「作文」「震災」「神隠し」「子殺し」といった現代社会が課題とするテーマについて取り上げたものであり、今後教材化されること念頭に置いて、そのための基礎研究になると考えた。

3 プロジェクトの成果と今後の方向性

全体の調整を図りながら、報告書は『平成30年度特別開発研究プロジェクト報告書 言葉を通して生きる力を育む国語科の授業に関する総合的研究』（東京学芸大学、2019年2月、96頁、85部）を発行した。上記の経過を踏まえて、構成は以下のような3部に分けてまとめた。

プロジェクトの概要 石井正己

第一部 附属小金井中学校の実践と検討

- 物語を語る「ことば」—単元「私たちが考える人間らしさ」の学習材— 数井千春
- 思いを伝える「ことば」—万葉集・防人歌— 愛甲修子
- 命を見つめ生きる力を育む災害伝承としての「言葉」

—『方丈記』と災害伝承の碑を中心に— 菅俊輔

第二部 言葉を通して生きる力を育むための教材研究

古典教材『方丈記』『枕草子』の小・中・高の内容決定のための課題

一生と死、恋愛と結婚、新暦と旧暦— 田中成行

枝 幹二氏の遺書に関する新たな資料 松原洋子

戦争と向き合う「ことば」—ヒロシマ・ナガサキから考える— 川嶋正志

第三部 言葉を通して生きる力を育むための講演

小学一年生が書いた関東大震災 石井正己

釜石小学校の残した遺産を伝えたい 石井正己

少年の体験と学問の形成—『故郷七十年』と『遠野物語』— 石井正己

編集後記 石井正己

この報告書をまとめることによって明らかになったことは、「授業の実践」に先立って、「教師の学び」がいかに大切かということであり、それを踏まえてはじめて、「授業の創造」は実現できるということが明らかになった。アクティブ・ラーニングにしても、今、「どのようにして教えるか」という「授業の方法」がしばしば話題になり、それが「教育課題」として重視される傾向にあるが、その前提として、むしろ、「どのようなことを教えるか」という「授業の内容」に対するたゆみない研鑽が必要であることが明確になった。

なお、本プロジェクトは教科書に掲載された教材を意識して実施してきたが、東日本大震災後に見直されつつある「生きる力」をテーマにしたことから、そこからの「教材開発」に力を注いできた。しかし、研究協議会等でしばしば議論されたことは、「こうした高度な授業は、選抜された生徒によって構成されている附属学校だからできることであり、日々の生活指導に追われる一般の公立学校ではなかなかできない」という批判であった。そこで、こうした成果をより普遍的なものにするために、これまでの成果を踏まえながらも、教科書に長く広く掲載されてきた「定番教材」を対象にした徹底的な検討を行い、マンネリ化した授業の活性化を図る方法を提案したいと協議して、次期プロジェクトを展開することにした。